

# 『源氏物語』論

— 『源氏物語』と〈女〉言説との「対話」—

村山 太郎

## 【0】はじめに

『源氏物語』研究におけるパラダイム転換は、一九八〇年代の「物語研究会」を中心とする「テクスト」論、「言説」分析の導入によるところが大きいといわれる<sup>注1)</sup>。このパラダイムシフトは、旧来の『源氏物語』研究に多大な反省と、批評方法の再考を促した。その影響は次のようなところにあらわれている。近年の『源氏物語』研究における、同時代的な共有〈知〉の発掘と、そうした同時代的なコンテキストに照らし合わせての作中人物や話題をめぐる新たな解釈の可能性を志向する態度。また、テクストの「語り」の多声的なありようと、読者に引き起こされるであろう意味への関心などである。これはひとえに、「読者」の発見という日本文学研究全体にもたらされた、「作品」の意味<sup>2)</sup>をめぐる認識上の変更といえるだろう。

しかし、こうした意味論—所与のテクストと読者の間に生起する意味へのまなざし—に関して、テクストが生成されつつある時空への批評のまなざしを欠いているという点

から批判が高まりつつある<sup>注2)</sup>。「テクストが生成されつつある時空への批評のまなざし」とは、書き手が、まさに書こうとしている今、「話題を話題にするメタ化の局面」(注3)に、どのようなことが起こり(⇨出来事性)、いかなることが行われているのか(⇨行為性)、これらの問いかけでもってテクスト生成の動態を問題化することで、そうしたまなざしが「源氏研究」には見られないのである。

本論文はかかるまなざしから、テクストが書き手と諸言説との不断の「対話」を通して生成されるものと捉え、『源氏物語』の表現性を考察するものである。書き手が、いかなる言説と、いかに向き合い、どういった「応答」を差し出すのか。これを書き手と言説の「対話」プロセスとして記述し、『源氏物語』の表現性を明らかにしていく。

では、『源氏物語』の書き手はいかなる言説と「対話」しているであろうか。『源氏物語』には、先行テクストなどにも見られる女性をめぐる典型的な価値観(⇨色好み)言説)を、模倣し主体化する男主人公光源氏の姿が描

き出されている。さらに、この男主人公が、様々な恋愛遍歴をたどり、試練の末、六条院世界という栄華の形を築きあげる姿が描き出されていることも周知のことであろう。

『源氏物語』の書き手と言説との「対話」プロセスは、このような男主人公の描かれ方や、彼と結ばれる女君の描かれ方の中に、捉えることができる。したがって、本稿では、書き手が「対話」する言説の一つとして（Ⅱ〈色好み〉言説）を取りあげる。また、〈色好み〉言説を主体化する男主人公と女君の関係がいかにか描かれているかを確認するのと、書き手の〈色好み〉言説との向き合い方を明らかにし、『源氏物語』の表現性に迫りたい。

## 【Ⅰ】光源氏と〈色好み〉言説

### 【Ⅰ】〈色好み〉言説と光源氏

ここでは、〈色好み〉言説の言説性、すなわち〈色好み〉言表の確認と、先行テキストなどにも見られる女性をめぐる典型的な価値観（Ⅱ〈色好み〉言説）、これを模倣し、主体化する男主人公光源氏の姿を確認する。

「さて、世にありと人に知られず、さびしくあばれたらん葎の門に、思ひの外にらうたげならむ人の閉ぢられたらむこそかぎりなくめづらしくはおぼえぬ。」

（『源氏物語』卷4「帚木」四七頁）

これは、かの「雨夜の品定」で、「世のすき者にて、ものよく言ひとほれる」左馬頭によって開陳される「かぎりなくめづらしく」感ずる姫君のありよう。ここでは、荒唐した「葎の門」に、「思ひの外」「らうたげ」なる姫君がいることに、殊更興趣を感ずる「すき者」（Ⅱ〈色好み〉）の姿が確認できる。同様に、源氏物語テキストにおいては、思わぬ場所（荒唐した屋敷）に佳女がいることに興を感ずる光源氏の姿が「源氏物語」テキストのいて散見される。

かりにても、宿れる住まひのほどを思ふに、これこそ、かの人の侮りし下の品ならめ、その中に思ひの外にかをしきこともあらばなど思すなりけり。

（『夕顔』一二二頁）

「かりにても、宿れる住まひ」で「思ひの外」に興趣ある色恋へと期待をふくらませる光源氏の姿。これは、先掲の左馬頭の文言と照応する姿といえるだろう。また、こうした〈色好み〉の姿は、『伊勢物語』における「昔男」や『うつほ物語』における「若子君」（兼雅）の姿にも通じるところである。一例に、『伊勢物語』「初段」「初冠」に描き出され、「昔人は、かくいちはやきみやびをなんしける」と評される「昔男」の姿を挙げる。

むかし、おとこ、うゐかうぶりして、平城の京、春日の里にしるよしして、狩に往にけり。その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。このおとこ、かいまみてけり。おもほえずふるさとに、いとほしたなくてありければ、心地まどひにけり。おとこの著たりける狩衣の裾を切りて、歌を書きてやる。〔伊勢物語〕<sup>（注）</sup>「初冠」

このように、佳女をめぐる〈色好み〉言説の言表<sup>（注）</sup>を共有する光源氏の姿は、〈色好み〉言説を主体化する人物として描き出されていると理解できる。他方で、テキストでは、こうした男主人公が〈色好み〉言説を絶えず参照し、模倣することで、主体化する姿も見られる。

いといたう荒れわたりてさびしき所に、さばかりの人の、古めかしうところせくかしづきすゑたりけむなごりなく、いかに思ほし残すことなからむ、かやうの所にこそは、昔物語にもあはれなる事どもありけれなど思ひつづけても、ものや言ひ寄らましと思せど、うちつけにや思さむと心恥づかしくて、やすらひたまふ。

〔末摘花〕一四頁

これは、末摘花の噂を聞きつけた光源氏が屋敷の様子を窺いに忍び込む場面である。ここでは、傍線部にある先掲の左馬頭の文言に見られるごとく、佳女をめぐる〈色好

み〉言説の言表を眼前の対象に確認し、「ものや言ひ寄らまし」と思う光源氏の姿が描かれていることが分かる。同時に、二重傍線部にあるような、「昔物語」、つまり〈色好み〉の物語を参照しつつ、「ものや言ひ寄らまし」との思いに勢いをつける光源氏の姿が語り出されている。このような光源氏の姿はテキスト中しばしば見られ、例えば次に挙げる紫の上を見出した際に発せられる文言にも、それは確認できる。

「あはれなる人を見つるかな。かかれば、このすぎ者どもは、かかる歩きをのみして、よくさるまじき人をも見つくるなりけり。たまさかに立ち出づるだに、かく思ひの外なることを見るよ」とをかしう思す。さても、いとうつくしかりつる児かな。何人ならむ、かの人の御かはりに、明け暮れの慰めにも見ばやと思ふ心深うつきぬ。

〔若紫〕一七一頁

北山に療養のため訪れていた光源氏は、「あはれなる人」を見出す。これが後の紫の上であるが、その際の文言に見える「かかれば」、「かかる歩き」、「かく思ひの外」からは、眼前の出来事に対して、〈色好み〉言説を参照し、当てはめ、意味づける光源氏の姿が窺え、こうした場面からも、〈色好み〉言説を模倣し主体化する光源氏の姿が確認できるといえよう。

以上のような光源氏の姿は、いまだ〈色好み〉の価値観を身につけ切れていない未熟な〈色好み〉としての姿と捉えられている。しかしここで問題とすべきは、言説と個をめぐって出来る個のありようを書き手がまなざし、描き出しているところであろう。言説の参照によつて事態を意味づけ、確認する個、換言すれば、〈色好み〉言説を模倣し、主体化する男主人公の描出は、一方で、平安期王朝物語諸テキストにおいて単に〈色好み〉として振舞う男主人公の描出を置いてみると、〈色好み〉言説との向き合い方が異なる書き手を想定しうるだろう。

## 二二 女性の〈美〉をめくり言表

こうしてテキストは、光源氏が〈色好み〉の価値観（＝〈色好み〉言説）を模倣し、主体化していく姿を描き出すわけだが、ここでは、こうした言説を主体化する人物の視点から、姫君の身体はいかに立ち現れてくるのかを、テキストから確認する。

御几帳の帷子ひき上げて見たてまつりたまへば、いとをかしげにて御腹はいみじう高うして臥したまへるさま、よそ人だに見たてまつらん心乱れぬべし。まして惜しう悲しう思ふことわりなり。白き御衣に、色あひいと華やかにて、御髪いと長うちちたきをひき結ひてうち添へたるも、かうでこそらうたげになまめきたる方添ひてを

かしかりけれと見ゆ。（「葵」一一二頁）

これは、光源氏の視点から語られる懐妊した葵の上の姿である。ここでは、光源氏の視点で、「白き御衣」から「御髪」の様子に移り、「かうでこそらうたげになまめきたる方添ひてをかしかりけれ」と評価する姿が見られる。姫君の容姿をかように愛でる〈色好み〉視点は「源氏物語」テキスト中に散見される。

見つる花の顔ども、思ひくらべまほしくて、例はものゆかしからぬ心地に、あながちに、妻戸の御簾をひき着て、几帳の結びより見れば、物のそばより、ただ這ひわたりたまふほどぞ、ふとうち見えたる。人の繁くまがへば、何のあやめも見えぬほどに、いと心もとなし。薄色の御衣に、髪はまだ丈にははづれたる末のひき広げたるやうにて、いと細く小さき様体らうたげに心苦し。（「野分」八四頁）

野分の吹きすさんだ翌日、混乱の中、夕霧はふと紫の上の姿を垣間見ることになる。この叙述はその際に、夕霧の視点から語り出される紫の上の姿である。ここにも、先的光源氏と同様な姫君の身体を見る見方でもって、紫の上の姿を「らうたげに心苦し」とする夕霧の姿が確認できるといえよう。さらに、こうした視点の移動は他テキストにも

見え、以下に挙げる用例は、そうした〈色好み〉が共有する姫君の見方、姫君の容姿をめぐる〈色好み〉言表である。

おとど（兼雅）、見巡りて、おはし給へれば、君、昨夜、おとどの包ませておはしたる綾搔練、織物の細長など着給ひて、歳四十に一つ二つ足らねど、いと貫はかに、兎めきて、らうたげなる顔して、髪、丈に二尺ばかりあまり給へり。いと若く見え給ふ。

〔うつつほ物語〕<sup>作</sup>「歳開下」六一〇頁

以上のように、〈色好み〉の視点や姫君を見る観点には、傍線部で示すように、共有された点があるという点が分かる。つまり、衣の様子から髪、顔に移り、その姫君の〈美〉を評価する点である。したがって、こうした〈色好み〉の視点によつて語り出される女性の〈美〉的容姿も、同時代的に共有された〈色好み〉言説の言表といえるだろう。物語の姫君は、〈色好み〉の〈美〉的範疇から排除されるということになる。

さて、次に確認するのは、〈色好み〉言説を主体化した男主人公と、それに見出され、養育された姫君紫の上の関係がいかに描かれているのかという問題である。

## 〔二〕規律と訓練

### 〔一〕光源氏の「教へ」

まずはじめに確認しておきたいのは、紫の上も、前節〔二〕の〈色好み〉の視点から見出された姫君であつたということである。

二条院におはしたれば、紫の君、いとうつくしき片生ひにて、紅はかうなつかしきもありけりと見ゆるに、無文の桜の細長なよらかに着なして、何心もなく物したまふさまいみじうらうたし。古代の祖母君の御なごりにて齒ぐろめもまだしかりけるを、ひきつくろはせたまへれば、眉のけぎやかになりたるもうつくしうきよらなり。心から、などかかうき世を見あつかふらむ、かく心苦しきものをも見てゐたらでと思しつ、例の、もろともに雑遊びしたまふ。〔末摘花〕四三頁

これは、二条院に紫の上を引き取り、ともに「雑遊び」をする場面で光源氏の視点から語り出される紫の上の姿である。ここでは、衣の様子から、顔に視点が移るといった、やはり前節のごとき視点の移動、評価の観点が窺えるといえよう。

一方で、紫の上の描かれ方にかんしては、そうした〈色好み〉の佳き姫君像を体现する「単なる理想的な愛妻」としての姿に比して、その幼少時には、〈色好み〉の価値観

からは逸脱する「野生児的」な側面が「清冽な個性の輝き」を放っているとする指摘<sup>5)</sup>がある。紫の上という作中人物の造形を簡明に二分割して整理する見方として貴重であるが、そのように紫の上を捉えたとき、彼女の幼少時に光源氏の数々の「教へ」、「諭し」が描き込まれていることは看過できないところであろう。

「君の御髪は我削がむ」とて、「うたて、ところせうもあるかな。いかに生ひやらむとすらむ」と削ぎわづらひたまふ。「いと長き人も、額髪はすこし短うぞあめるを。むげに後れたる筋のなきや、あまり情なからむ」とて、削ぎはてて、「千尋」と祝ひきこえたまふを、小納言、あはれにかたじけなしと見たてまつる。(「葵」一〇三頁)

ここでは、「久し」く髪を削がず、光源氏に「うたて」と評される紫の上が、傍線部にあるように、光源氏自らの手でもつて、髪を切りそろえられていることが分かる。その際、光源氏が「いと長き人も、額髪はすこし短うぞあめる」と、「額髪」、あるいは、「額髪」のかかる「そば目」を姫君の〈美〉的観点として扱う〈色好み〉の価値観になぞるように、紫の上の髪を切りそろえていくことが確認できよう。

君は御衣にまとはれて臥したまへるを、せめて起こして、

「かう心憂くなおはせそ。すずろなる人は、かうはありなむや。女は、心やはらかなるなむよき」など今より教へきこえたまふ。(「若紫」二二〇頁)

また、ここでは、幼い紫の上に、「すずろなる人は、かうはありなむや」と女としての立ち居振る舞いを「教へ」ていく光源氏の姿が確認できる。

「いで君も書いたまへ」とあれば、「まだやうは書かず」とて、見上げたまへるが何心なくうつくしげなれば、うちほほ笑みて、「よからねど、むげに書かぬこそわろけれ。教へきこえむかし」とのたまへば、うちそばみて書いたまふ手つき、筆とりたまへるさまの幼げなるも、らうたうのみおぼゆれば、心ながらあやしと思す。

(「若紫」二二二頁)

さらに、髪型、女としての心用意にとどまらず、紫の上の書画の手法にと、和歌を書きつけ、返歌を書くよう紫の上に促し、和歌の詠み方、手習いを「教へ」る光源氏の姿も確認できる。

こうした場面は、自己の価値観、したがって〈色好み〉言説下の女性像という鑄型に紫の上をはめ込もうとする光源氏の姿が描き出されているという点で重要といえよう。こうした光源氏の〈色好み〉の価値観に姫君を取り込む姿

は、後に、紫の上からの和歌とその筆跡を見た折、筆跡は自分によく似て、少し恨みがましい、女らしいことをも歌に書きつけるようになったと、紫の上の成長ぶりに満足する光源氏の姿に直截に現れているといえる。

御返り、白き色紙に、

風吹けばまづぞみだるる色かはるはさちが露にかかる  
ささがに

とのみあり。「御手はいとをかしうのみまさるものかな」と独りごちて、うつくしとほほ笑みたまふ。常に書きかはしたまへば、わが御手にいとよく似て、いますこしなまめかしう女しきところ書き添へたまへり。何ごとにつけても、けしうはあらず生ほし立てたりかしと思ほす。

〔賢木〕一七四頁)

## 二二 良き妻をめぐる言表

以上のような光源氏の「教へ」は、以下に挙げる左馬頭の文言に見える、女の嫉妬を「心づきなく」思い、「おいらか」なることを良き妻の要件とする（色好み）の価値観から、紫の上の嫉妬を論していく姿にも見られる。

（左馬頭）「はやう、まだいと下臈なりし時、あはれと思ふ人はべりき。聞こえさせつるやうに容貌などいとまほにもはべらざりしかば、若きほどのすき心には、この人

をとまりにとも思ひとどめはべらず、よるべとは思ひながら、さうさうしくて、とかく紛ればべりしを、もの怨じをいたくはべりしかば、心づきなく、いとかからで、おいらかならましかばと思ひつつ、あまりいとゆるしなく疑ひはべりしもうるさくて、かく数ならぬ身を見もはなたで、などかくしも思ふらむと、心苦しきをりをりもはべりて、自然に心をさめらるるやうになんはべりし。」

〔帚木〕五八頁)

紫の上と光源氏の関係を揺るがした女性性は、明石の御方・朝顔の齋院・女三の宮、と大きく三人に分けられよう。その折々、特に前者二人、明石の御方と朝顔の齋院の場合、紫の上の、光源氏に対して嫉妬を露わにする姿が描かれていることに気づく。そうした場面で、光源氏がいかなる姿として描き出されているのかを確認する。

女君（紫の上）には、（明石の御方の存在を）言にあらはしてをさをさ聞こえたまはぬを、聞きあはせたまふこともこそと思して、「さこそあなれ。あやしうねぢけたるわざなりや。さもおはせなむとおもうふあたりには心もとなくて、思ひのほかに口借しくなん。女にてあなれば、いとこそものしけれ。尋ね知らでもありぬべきことなれど、さはえ思ひ棄つまじきわざなりけり。呼びにやりて見せたてまつらむ。憎みたまふなよ」と聞こえたま

へば、面うち赤みて、(…後略…)。「濡標」一一三頁)

(朝顔の齋院のもとに通うことしきりであつた光源氏は)  
「このほどの絶え間などを見ならはぬことに思すらむも、  
ことわりにあはれなれど、今はさりとて心のどかに思せ、  
おとなびたまひためれど、まだいと思ひやりもなく、人  
の心も見知らぬさまにもしたまふこそらうたけれ」な  
ど、まろがれたる御額髪ひきつくるひたまへど、いよいよ  
よ背きてものも聞こえたまはず。(「朝顔」八五頁)

これらの用例に見える「うらみたまふなよ」や、「心の  
どかに思せ」と、これも、先掲の左馬頭の言う良妻として、  
欠点やありようを教え諭していく光源氏の姿が描かれてい  
ることが確認できよう。

このように、(色好み)言説に女君を取り込んでいく、  
そういつた男女関係が『源氏物語』テキストには描き込ま  
れているわけであるが、さらに、書き手は、(色好み)の  
よしとする価値観を規範化し、内面化する女君の姿をも描  
き出していることが確認できる。

①はかなき御すさびごとをだに、めざましきものに思し  
て、心やすからぬ御心さまなれば、いかが思さむと思す  
に、いとつれなくて、「あはれなる御譲りにこそはあな  
れ。ここには、いかなることをおきてたてまつるべきに

か。めざましくて、かくてはなど咎めらるまじくは、心  
やすくてもはべなむを、かの母女御の御方さまにても、  
疎からず思し数まへてむや」と卑下したまふを、「あまり、  
かう、うちとけたまふ御ゆるしも、いかなればとうしろ  
めたくこそあれ。まことは、さだに思しゆりて、我も人  
も心得て、なだらかにもてなし過ぐしたまはば、いよいよ  
あはれになむ。ひが言聞こえなどせむ人の言、聞き入  
れたまふな。すべて世の人の口といふものなむ、誰が言  
ひ出づることともなく、おのづから人の仲らひなど、う  
ちほほゆがみ、思はずなること出で来るものなめるを、  
心ひとつにしづめて、ありさまに従ふなんよき。まだき  
に騒ぎて、②あいなきもの恨みしたまふな」と、いとよ  
く教へきこえたまふ。心の中にも、「かく空より出で来  
にたるやうなることにて、のがれたまひがたきを、憎げ  
にも聞こえなさじ。わが心に憚りたまひ、諫むることに  
従ひたまふべき、おのがどちの心より起これる懸想にも  
あらず。堰かるべき方なきものから、をこがましく思ひ  
むすばほるさま世人に漏りきこえじ。(…中略…)」な  
ど、おいらかなる人の御心といへど、いかでかはかばか  
りの限はなからむ。③今はさりとてとのみわが身を思ひ  
あがり、うらなくて過ぐしける世の、人笑へならむこと  
を下には思ひつづけたまへど、いとおいらかにのみもて  
なしたまへり。(「若菜上」三九頁)

如上の場面は、女三の宮が光源氏の元に降嫁することが決定し、それを紫の上に光源氏が報告する場面。①の二重傍線部、紫の上の嫉妬を心配する光源氏に対して、紫の上の反応は、傍線部のごとく、「つれなくて」、女三の宮降嫁をありがたいものと「卑下」するといった、嫉妬も、動揺もみられない、いわば「色好み」言説下の良妻にふさわしい姿。さらに②の二重傍線部では、やはり先述の「嫉妬」怨み」を禁する光源氏の「教へ」に対して、傍線部に見える「心の中」に、「憎げにも聞こえなきじ」や、「をこがましく思ひむすぼほるさま世人に漏りきこえじ」と、先の光源氏の諭しをなぞる形で自らを律し、これも、「色好み」の良妻とする「おいらか」なる妻として振る舞う紫の上の姿が描き出されていることが分かる。つまり、テキストは、言説の訓練とその内面化という局面を、「色好み」言説に関わり合う女君の姿を描き出すことによつて差し出しているのである。

当節では、以上のことを確認してきたが、問題は、テキストが、言説を内面化する女君の姿とともに、内奥に苦悩を抱えた姿を同時に描き出しているところであろう。先掲の用例、傍線部③がそれにあたり、「おいらかに」対応する紫の上の内奥、具体的には「下には思い統け」る苦悩が描きこまれていることが分かる。女三の宮降嫁という出来事、そこに現れる紫の上の「おいらか」なる振る舞いと内奥の苦悩は、これ以降にも散見される。次節において確認

するのは、そうした紫の上の姿である。

### 【三】〈女〉の存在性

#### 【二】紫の上の苦悩―規律の内面化と内奥の苦悩

「などで、よろづのことありとも、また人を並べて見るべきぞ。あだあだしく心弱くなりおきにけるわが怠りに、かかることも出で来るぞかし。若けれど中納言をば思しかけずなりぬめりしを」と、我ながらつらく思いつづけるるに、涙ぐまれて、「今宵ばかりはことわりとゆるしたまひてんな。これより後のとだえあらんこそ、身ながらも心づきなかるべけれ。またさりとて、かの院に聞こしめさむことよ」と思ひ乱れたまへる御心の中苦しげなり。すこしほほ笑みて、「みづからの御心ながらだに、え定めたまふまじかるなるを、ましてことわりも何も。いづこにとまるべきにか」と、言ふかひなげにとりなしたまへば、(…中略…)とみにもえ渡りたまはぬを、「いとかたはらいたきわざかな」とそそのかしきこえたまへば、なよやかにをかしきほどにえならず匂ひて渡りたまふを、見出だしたまふもいとだにはあらずかし。

(「若菜上」四九頁)

これは、女三の宮降嫁後、女三の宮の元に夜離れなく通う源氏が、そのような事態に馴れない紫の上を慰める場面。

新婚の儀礼、女三の宮の父朱雀院に対する目もあり、今夜ばかりは「ことわり」にと、傍線部胸中苦しそうな源氏に對して、「言ふかいなげにとり」なす紫の上の対応が確認できる。また、「中略」以下、「とみにも」女三の宮方に赴かない光源氏を自ら「そそのか」す様子が見られる。つまり動揺を見せず、毅然とした紫の上の対応ぶりが語られているといえる。しかし同時にテキストは、二重傍線部、光源氏を見送る紫の上の心中を、「いとただにはあらず」と描き出していくのである。

①あまり久しき宵居も例ならず、人や咎めむ、と心の鬼に思して入りたまひぬれば、御衾まゐりぬれど、げにかたはらさびしき夜な夜な経にけるも、なほただならぬ心地すれど、かの須磨の御別れのをりなどを思し出づれば、「今はとかけ離れたまひても、ただ同じ世の中に聞きたてまつらましかばと、わが身までのことはうちおき、あたらしく悲しかりしありさまぞかし。さてその紛れに、我も人も命たへずなりましかば、言ふかひあらまし世かは」と思しなほす。②風うち吹きたる夜のけはひ冷やかにて、ふとも寝入られたまはぬを、近くさぶらふ人々あやしとや聞かむと、うち身じろきたまはぬも、なほいと苦しげなり。夜深き鶏の声の聞こえたるものあはれなり。(「若菜上」五二頁)

この場面でも、同様の苦悩が描かれている。①傍線部にあるように、例ならぬ夜更かしが人の目にとまると不都合があるろう、つまり、光源氏が女三の宮の元に「夜離れ」なく通うことを悩んでいるのはと人が思うだろうと、疑心暗鬼のうちに寝入ろうとする紫の上の姿が描かれ、同時に二重傍線部に見える「なほただならぬ心地」する様子が描きこまれている。また、②の傍線部、なかなか眠ることができない紫の上は、周囲の眼を気にし、身じろぎもしない様子であつたが、二重傍線部「なほいと苦しげ」な様子であつたことが描きこまれていくことが確認できる。このように、テキストは、女三の宮の降嫁という出来事、そこに現れる紫の上の「おいらか」なる振る舞いと、それと背馳した内奥の苦悩という描き方を通して、「色好み」の「教へ」や良妻としてのありようを規範として内面化しても、苦悩の尽きない女君の姿を描き出しているのである。

## 「二（色好み）と女君

ところで、これまで〈色好み〉言説の確認と、そうした言説を主体化する男主人公と女君の関係が、テキストではいかに語られているのか見てきたわけだが、やや迂回して、これを先行テキストに確認する。

かくて後、おとど（若小君・兼雅）、一条殿にあからさまにもおはせず、異御心なし。大人二十人ばかり、うな

ゐ・下仕ひなど、いと多く召し集めて、使はせ奉り給ふ。夜昼、昔のことを悔い、行く先のことを契り、あはれに飽かず思ざるのままに聞こえ尽くし給ふ。北の方（俊蔭の娘）、御歳三十に少し足らぬほどなる、御かたちただ今盛りにて、思ほすことなくておはするままに、光を放つやうに見え給ふ。子、はた、さらにも言はず、この世の人にも似ず、いとありがたく類なし。

（『うつほ物語』「俊蔭」五三頁）

『うつほ物語』では、〈色好み〉兼雅に見出された北の方と兼雅の関係は、男に「異御心」なく、北の方も「思ほすこと」のない、極めて良好なものとして語られていることが分かる。

このような〈色好み〉とそれと結ばれる女を語る語り方は、『落窪物語』や『住吉物語』にも見られるところである。しかしながら、『源氏物語』テキストの書き手は、〈色好み〉光源氏と関わった紫の上が、〈色好み〉の「教へ」や良き妻としてのありようを規範として内面化しつつも、同時に、苦悩の尽きない様子であったことを描き出していた。

対には、例のおはしまさぬ夜は、宵居したまひて、人々に物語など読ませて、聞きたまふ。「かく、世のたとひに言ひ集めたる昔語りどもにも、あだなる男、色好み、二心ある人にかかづらひたる女、かやうなることをいひ

集めたるにも、つひによるかたありてこそあめれ、あやしく浮きても過ぐしつるありさまかな。げに、のたまひつるやうに、人よりことなる宿世もありける身ながら、人の忍びがたく飽かぬことにするもの思ひ離れぬ身にてややみなむとすらん。あぢきなくもあるかな」など、思ひつづけて、夜ふけて大殿篋りぬる暁方より御胸をなやみたまふ。（『若菜下』一六九頁）

これは、紫の上が最終的に、自己と〈色好み〉、すなわち光源氏との関係を総括する場面である。傍線部にあるように、〈色好み〉に関わった女性で、自分だけが不思議に「よるかた」のない、浮いたようなありさまであったと、結局〈色好み〉と関わって幸福ではなかった自己のありようを語り出していることが分かる。この文言は、『源氏物語』テキストの書き手が、〈色好み〉と関わる女性という関係（先行テキスト）に対して、いかに問い掛け、どういった答えを提示（「対話」―「応答」）しているのかを考える上で重要なものといえる。すなわち、書き手は、『うつほ物語』などのごとく、〈色好み〉と結ばれる女という関係を一元的に女の幸福な姿を語ることで理解していく言説空間にあつて〈色好み〉言説のもので一方的に把握され、取り込まれ、その価値世界を内面化する、あるいは、してしまふ女の姿をあぶり出し、しかしながら、苦悩を抱え、幸福ではない紫の上の姿を描き出すことによつて、〈色好み〉言説へ「応

答」しているのである。

#### 【四】おわりに

光源氏と紫の上の関係は、「うつほ物語」の「若子君」(兼雅)や「落窪物語」の「道頼少将」の場合と同様、男主人公が薄倅の佳女を得るというロマンのもとにはじまった関係である。こうした〈色好み〉の物語―男女一对の栄華獲得、権勢家誕生といった言説空間にあって、「源氏物語」テキストの書き手は、〈色好み〉をめぐる先行テキストでは、想像(創造)もできないような女の姿を語り出していったといえよう。書き手と〈色好み〉言説との「対話」のプロセスは、かかる女性の存在性を「応答」として描き出したところにあるといえる。〈色好み〉言説に対するテキストの「対話」―「応答」のありようは、〈色好み〉に結ばれることで、結局幸福になれなかつた女の姿を差し出すことで、〈色好み〉言説を相対化し、批評しているところにあるといえるだろう。「源氏物語」テキストの〈色好み〉言説内部の女へのまなざし、そして、新たな女をめぐる認識の地平の開示は、「源氏物語」の表現性をよく指し示していると考ええる。

#### 注

(注1) こうした理論の先鞭として、土方洋一「源氏物語の言語の構造・序説―テキスト論の視座から」(『国

語と国文学』所収、一九八一年六月)や三谷邦明「源氏物語古注の復権―年間テーマ(ヘイクター・テクスチュアリティ)によせて」(『物語研究会会報』5)所収、一九八二年一〇月、物語研究会「編集・発行」などが挙げられる。また、「源氏物語」研究におけるこのような動向と展開については、三田村雅子「〈方法〉語りとテキスト」(『国文学―解釈と教材の研究』所収、一九九一年九月二〇日、學燈社「発行」)に簡略にまとめられている。

(注2) このような批判を松浦寿輝は以下のように指摘し、展開している。

音楽でも絵画でも詩でも映画でも、およそある「作品」を前にした享受者のとりうる態度として、その「作品」のすでに完成されてある現在の姿を静的な構造体として考察する場合と、それが徐々に形をなしていった創造行為の現場をあたうるかぎり現実的に追体験しようとする場合の二つがありえよう。美学・美術史・音楽史といった既成の芸術研究のディシプリンがしばしば陥りがちであった弊の一つは、「作品」をもうすでに凝固しきつた既存の所与と見なし、そこに静的な分析ツールや概念格子をあてがうだけで事足りりとしてきたという点であろう。そこからすっぱりと抜け落ちているのは、行為の時空に注がれ

るまなざしである。あくまで行為の現場に執着し、「作品」をその生成と運動のさなかで捉えようとするとき、「作品」は我々の前に、冷えきつた因習的アカデミズムの言説からはみ出した新鮮な姿で立ち現れ、思いがけない刺激を波及させてくれはしまいか。(松浦寿輝『官能の哲学』、一六七頁、二〇〇一年五月七日、岩波書店)

(注3) 竹村信治『言述論 (discours) -for 説話論集』、七頁、二〇〇三年五月三十一日、笠間書院

(注4) 『源氏物語』の本文は全て、『源氏物語』「小学館 完訳日本の古典」(阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男「校注・訳者」、一九八九年四月一日、初版第一刷発行、小学館)に拠った。以下、巻名・頁数を記す。

(注5) 『伊勢物語』「日本古典文学大系9」、昭和三十二年十月五日第一刷発行、昭和四十年七月二十日第八刷発行、板倉篤義・大津有一・築島裕・阿部俊子・今井源衛「校注」、岩波書店

(注6) 〈色好み〉言説の言表分析にかんしては、真部奈美『徒然草』と王朝(上)、『Problematique II 〈文学/教育2〉』所収、二〇〇一年七月一日、Problematique [編集・発行]に詳しい。

(注7) 『うっほ物語』の本文は全て『うっほ物語 全改訂版』(一九九五・一〇「初版」、二〇〇一・一〇「改

訂版」、室城秀之「校注」、おうふう)に拠った。

(注8) 今井久代『源氏物語構造論―作中人物の動態をめぐる』、一二九頁、二〇〇一年六月三〇日、風間書房

(広島大学大学院)